

III 日本語教育と私

私にとって日本語教育は何か

キム・ヨンナム

■ 1. はじめに

早稲田大学・大学院の日本文化研究科に2004年度秋の入学が予定されている者に対し、入学前の事前レポートが課された。「私にとって日本語教育は何か」というテーマをもって、入学予定者はそれぞれ日本語教育に対する自分なりの定義および自分自身において日本語教育が持つ意味などを考察する。今回の入学予定者の一人として、私も「自分にとって日本語教育は何か」を再び考えるようになった。しかし、今まで日本語教育とは日本語という言語を教えることだと、その意味を額面どおりに漠然と認識していたので、「だから日本語教育は何なのか」と自分にしつこく問いかけても、その答えは容易に見つけられなかった。

おそらく「日本語教育は何か」という質問に「正解」に当たるものはないかもしれない。しかし、私自身は日本語教育もどう思っているのか、自分なりの考え方やポリシーを構築していくことは、将来日本語という言語を教える立場になる人としては欠かせることのできない貴重な過程のひとつであろう。

私が最初考えた日本語教育とは、以下の「2. 動機文」のようなものであった。

■ 2. 動機文

今日の言語としての「日本語」は、日本人を対象にした「国語教育」と、日本語を

母語としない人 — すなわち外国人を対象にした第二言語としての「日本語の教育」に分かれているようだ。両者の違いと言えば、日本語が当事者にとって母語にあたるのか、それとも第二、三番目の言語になるのかであろう。

言語が人とコミュニケーションするための手段の一つであることを考えると、すでに他の言語が話せる人が再び日本語の習得をめざすということは、自分の持ったコミュニケーション手段をもっと多様化しようとするもくろみがあるからではないのか。もっと簡単にいうと、第二言語として日本語を勉強する理由は、日本語を利用して人と話したいからである。このように考えると「日本語教育」というのは、すでにコミュニケーションの能力を持った人に、新しい表現手段の一つとして「日本語で話す方法を教えること」になる。

しかし、私も実は、いわゆる「日本語学習者」の一人であるが、いざ第二言語を習得していくと、コミュニケーションの一手段に過ぎないはずの該当言語が、だんだん上達することだけがすべての目的として変わってしまう。コミュニケーションの「手段」としての日本語が、上達を「目的」とする言語に変容してしまうのである。このように、学習者が上達だけを習得の最大の目標として捉えるのは、日本語が上手になればなるほど、日本人とのコミュニケーションもうまくいくだろうと期待しているからである。ところが、日本人との接触がそれほど頻繁ではない場所で日本語を学習したものは、スコアで表れる日本語レベルからは上級者に間違いないが、コミュニケーションの手段としての日本語能力という側面からみると、必ずしも上級の日本語話者とはいえない場合もある。

私個人の経験であるが、韓国ですでに上級のレベルまで至った状態で、来日したばかりのとき、日本人とのコミュニケーションがうまくできず、もじもじした時期があった。日本語が第二番目の言語であるならば、コミュニケーション能力はすでに持っているはずで、その上自分なりに日本語をずいぶん勉強してきたと思っていたが、意外と会話のやり取りは期待した水準に至らなかった。もっともの悩みは、自ら感じる自分の内面における葛藤である。

「このことを日本人に言っているのか」

「相手の言葉にこんな反応とっていいのか」

もはや日本語の問題ではなく、人とのコミュニケーションに障害を感じたのである。このようなコミュニケーション行為における心理的負担は、個人の性格、学習環境、学習期間などが複合的に作用しているだろうと考える。一時私は、「日本語らしい」表現を磨いて完全に日本人になりきってしまえば、このような問題も解決できるのではないかと考えたこともある。ところが、そもそも「日本人になりきる」こと自体が不可能だし、そのようなおろかな努力を繰り返すと、結局は自分のアイデンティティーまでが乱れる結果を招く恐れがあることも気づいた。

今も私は、たびたび感じるそのコミュニケーションの障害を乗り越えるため、不断の努力をしてしる。しかし、現在におけるその努力というものは、「日本語らしい」日本語を駆使する形ではなく、自分の日本語の能力をわかったうえで、もっている能力を最大限に活用し、心から人と接し合おうとすることである。私自身も日本語の学習者であるため、日本語で話すときの彼らの気持ちが誰より理解できるだろうと思う。日本語で話したがっている学習者を手伝い、各自のコミュニケーション能力を活用して、日本語という手段を持って人と話し合えるように、彼らを手伝いたい。

私にとって日本語教育とは、コミュニケーションの手段の一つである日本語を用い、心から人とコミュニケーションできるように学習者を手伝い、励ますことである。

2.1. 動機文に対する諸指摘とその考察

上記の拙文に対し、すでに大学院で研究なさっている方々から貴重なコメントをたくさんいただいた。動機文に関してのいろいろなコメントから、おおむね次のような諸指摘をまとめることができた。

2.1.a 動機文に対する諸指摘

- i 「コミュニケーション能力」や「コミュニケーション」といった用語をどのように捉えているのか。

- ii 母語と第二言語におけるコミュニケーション能力の関連性は？
- iii 結論の「心から人とコミュニケーション」するのはどういうことか？ また「日本語学習者を手伝い、励ます」ことはどんなことなのか？
- iv なぜ、日本語の教育が日本語で話す方法に結びつくのか？ なぜ日本語を「手段」として切り分けるのか？
- v 「日本人になりきる」と「アイデンティティが乱れる」ことの意味とこの2つの関連性は。

2.2. 考察

広辞苑ではコミュニケーションを「社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達。言語・文字その他視覚・聴覚に訴える各種のものを媒介とする」ものと定義している。しかし、実際のコミュニケーションは、人間の知覚・感情・思考などが話し手から聞き手に一直線に進むものではない。ハウエル・久米（1992）は、現実の場面でのコミュニケーションは話し手と聞き手が双方に影響を与えながら双方向的に行われるという視点に立ち、双方が話し手であり聞き手であるというジョイントベンチャーモデルを提示している。このモデルは、コミュニケーションという共同作業に参加する両方が送り手と同時に受け手であり、双方が個人内および対人間でフィードバックを出しつづけるということを示している。

人間同士のかかわりの中で生まれるコミュニケーションという行為は、主に両者がともに使える特定の言語を媒介にして行われる。同じ言語を母語とする人同士が社会生活の中で行うすべての言葉のやり取りは「コミュニケーションを図る」行為なのである。母語以外のほかの言語の習得を目指す人は、その目標言語を用いて人とコミュニケーションをしようと志すことになる。

人はひとつ以上の言語を話せる。山奥やジャングルなどで捨てられ、狼により育てられたなどの特殊なケースを除いて、人間社会で生まれ育った普遍的なすべての人は、その人が一生受ける言語教育のレベルにかかわらず「mother tongue」として、ひとつ以上の言語を話すことができる。コミュニケーション能力とは生得的に身につく「母

語」と同じく、母語での生活とともに自然習得できるものだと思う。自分の考え方や気持ちを相手にわかってもらうために、また相手が何を言おうとするのかその本意を理解するために、われわれはときには言いまわしをしたり、ジェスチャーを入れたりなど、コミュニケーションするためにさまざまな工夫をする。相手に言いたいことを伝えるとき、どのような方法をとるのかは話し手の選択である。はっきり言いたい、強調したい、言わなくても察してもらいたいなど、目的を持った場合の話し手は、場面の雰囲気や状況などまでを考慮して意図的に発話する。このように、聞き手に自分の意図を伝えるため話し手が工夫を図ることができるのは、人間がコミュニケーション能力を持っているからである。また、ハウエル・久米(1992)のジョイントベンチャーモデルを考えると、話し手の意図が聞き手に感知できることもやはり人間がコミュニケーション能力を持っているからである。

Canale & Swain (1980) は、コミュニケーション能力を文法能力 (grammatical competence), 社会言語能力 (sociocultural competence), 談話能力 (discourse competence), 方略能力 (strategic competence) の四つの下位能力から構成されるとした。第二言語である日本語でコミュニケーションしているからといって、身についたこのようなコミュニケーション能力が衰えるとは思わない。日本語での文法能力や、もしくは(日本文化を背景にした)社会言語能力などは言語とともにある程度の学習を要するかもしれないが、談話能力や方略能力などは第二言語習得以前の問題なのである。母語でならば限られた語彙や決まった文型を用いても多様な表現ができるのに、学習途上の日本語をもってでは、こう言っているのか、または相手の話を聞こえたとおり受けいれているのかなどと迷ってしまうのは、学習者が自分の使う日本語に自信を持っていないからである。

人間がコミュニケーション能力を持っているといっても、すべての人が同じレベルの能力を発揮しているとは一概に言えない。言語能力の四技能である「読む、書く、話す、聞く」の面においても人によってその力量は異なる。コミュニケーション能力もこれと同じく、同一言語でのコミュニケーションであっても、その能力には個人差

がある。ところが、このようなコミュニケーション能力の育成や個人差を補うためのトレーニングなどは、「日本語教育」の領域外の問題ではないのか。「日本語教育」では、学習者がすでに持っているコミュニケーション能力を活用し、第二言語である日本語でコミュニケーションできるようにするには、どうすればいいのかを考えるべきだと思う。

第二言語として日本語を勉強する学習者の窮極的なコールは、母語で話すときのよう
に日本語でも自在にコミュニケーションすることである。ところが、母語での作文
が下手な人は、日本語でも上手には書けないし、日本語でのコミュニケーションと
いっても、学習者本人の持っているコミュニケーション能力を超える流暢な日本語は
期待しにくいのである。それにもかかわらず、学習者なら誰もが、どうすれば上手に
日本語で話せるのか、その方法を学ぼうとする。言い回しや決り文句ばかりがその方
法になるわけではない。文法や語彙、発音など言語内部の教育と、日本人独特のジェ
スチャーや言語習慣などといった言語外部の教育にいたるまで、日本語教育として扱
われているほとんどの領域を、教える対場も習う側も「日本語でのコミュニケーション
方法」として認識しているのではないのか。

しかし、学習者が日本語でのコミュニケーションにおいてその方法ばかりを追求す
ると、教わった枠を超える日本語はできなくなってしまふ。学習期間が長くなり、日
本語に関する知識が深まるほど、学習者はあの「方法」に支配され、言いたいことが
言えなくなってしまふ。コミュニケーション場面でどのように表現するかは話し手の
選択ではなかったのか。母語では自由に、気の向くままコミュニケーションしてきた
人が、せっかく学習した第二言語である日本語でのコミュニケーションになると心
にあるものをそのまま吐かせない。まだ語彙が足りない、もしくはぴったり合う日本語
での表現がわからないからコミュニケーションがうまく進まないと思い、ますます
「もっと日本語らしい表現」や「より自然な日本語」を求めるのである。

このような「日本語らしい」または「自然な」日本語の模索は、学習者の日本語で

のコミュニケーションをさらに人工的な方法の下に収めることになるだろう。学習者は日本語のルールや法則のようなものにこだわり、実際の場面では「心からのコミュニケーション」ができなくなってしまうだろう。日本語の学習が長くなればなるほど、また、母国で日本語を習得し、実際コミュニケーションするチャンスがそれほど十分ではなかった人ほど、第二言語としての日本語は上達を「目的」とする言語として徐々に形が変わっていくと思う。

日本語はコミュニケーション手段の一つである。日本語という言語環境の下で人と接するためには、日本語固有の特性を理解し、またある程度定まった枠も従わないといけない。しかし、これらを絶対間違っはいけないルールとして認識すると、人と関わるためのコミュニケーション場面において、規則正しい日本語ばかりに集中してしまい、結局心からのコミュニケーションはできなくなるだろう。

日本語でのコミュニケーションがうまく進まない感じがすると、学習者はいつもその原因が自分にあると思う。相手の日本人は「ネイティブ・ジャパニーズ・スピーカー」であるため、日本語でのコミュニケーションがつかずくと、学習者は自分が何を言い間違えたか考えてしまう。しかし、コミュニケーションは周知のとおり、話し手と聞き手による双方向的な関係のものである。母語でコミュニケーションするとき人は、自分の発音や文法に問題ないかを心配しながら発話しない。またどのように伝えるかは考えても、その表現の仕方が正しいか、そのまま通じるかなどの心配はしない。母語も日本語もコミュニケーションするための言語の一種だし、そのコミュニケーションをする能力も人はすでに持っている。おそらく、生まれながら身についた言語と意図的に習得した言語との差は、自然に話せるか、それとも意識的に話せるかであろう。第二言語を用いて心からコミュニケーションするのは不可能なことなのか。学習している言語（日本語）の上達を目標にするのではなく、今まで習得したものを存分に活用し、人とコミュニケーションすることを目的にして日本語を使えないのか。私にとって日本語教育とはこのような疑問から出発しているし、その解答を求めることに研究を目標が定まっているといえる。

■ 3. 対話

3.1. 日本語先生との対話

「日本語教育とは何か」という課題作成においてその対話の相手にしたのは、現職日本語教師のKである。Kとは韓国で出会い親しくなった。当時、彼女は地方の私設ランゲージ・スクールで日本語を教えていたが、実のところ、韓国に来る前までは教えた経験がまったくなかったという。ネイティブ・スピーカーだということだけで海外で日本語を教えるチャンスを得たものの、経験不足に、しかもほかの日本人教師もいない状況だったので、クラスをどう運営したらいいかいつも悩んでいたことを覚えている。その後、契約が終わり帰国したKは、日本で「日本語教育」の学校を通い、修了してからは本格的に日本語教育現場に臨んでいる。現在彼女が教えているところは、第二言語として日本語習得を目標とする外国人を対象に開かれた日本語学校である。

日本語教育といえども、その対象者は広範囲でさまざまである。日本語が母語である人も、そうでない人も、日本語の学習においては教育の対象になるだろうが、学習者と日本語との関係によってその教育の方向や範囲は異なる。日本で生まれ育ち、すでに母語として日本語を話す人と、ほかの国で第二言語として日本語を習得する人とは、その学習の段階をはじめ領域にも扱う分野にも差がある。

将来、韓国に帰り、韓国現地で第二言語として日本語の習得を目指す人々の教育に当たることを目標とする私において、Kの経験を聞かせてもらうことは有意義な時間になるだろうと思った。また、今現在「日本語教育」に当たっている彼女は、「理想の教育」と「現実の教育」の間にある隔たりの幅を肌で感じるだろうと思い、本レポートの対話の相手として選んだ。

3.2. 「上達」と「語学に対する自信」は反比例する

私の場合、韓国の大学で4年も日本語を学習し、日本語能力1級資格をすでに所持して来日したが、日本語でのコミュニケーションは自分の期待を裏切り、うまく進まなかった。何よりも日本語で発話する前に内省の時間がだんだん長くなることと、それにより発話のチャンスを逃したり、または自ら発話をやめることがよくあった。相手の日本語に対する反応のときも同じである。実際のコミュニケーション場面では、テキストのようなかじこまった表現、または先生やテープによるゆっくりしながらはきはきした音声にはなかなか接しにくい。なじんでいない環境の中で、人によって異なる話し方や音色などが飛び交っていると、ときおり一度で話の内容を聞き取ったとしても今度はどう反応しようかと、考え込んでしまう。

このような状況が母語でのコミュニケーション場面だったら躊躇がないのに、どうしての日本語でのコミュニケーションはいつも心からでなく、頭で意識しながら話しているのか。まず考えられるのは、主に母語が中心になった日常生活の中で意識的に第二言語を習得してきたときの場合、特にこのような現状が起りやすいのではないかということである。第二言語の学習を自国ではじめる場合と、目標言語を日常使わないといけない該当国の環境の中で習得する時とは、第二言語に対する学習者の意識度やコミュニケーション活動においての円滑さにある程度、差が見られるのではないかと思うようになった。今回Kと「日本語教育」をトピックにした対話時間を持ったきっかけに、以前から疑問を抱いていたことをまず聞いてみた。(K：友達、対話の相手 W：私、筆者)

W：学生の中で、自信満々の学生はいる？

K：いる。いるよ。だから、自分の実力をすごくもっと上に思っちゃって、すごく話せると思う。そうだね・・・いる、いる。

W：やっぱり、人の性格によるのかな。でも、そのような人は、逆に勉強しなくなるんじゃない？

K：うん～。自分ができると思っているから。たぶん、すごいポジティブだなと思

うけどね。今あんまり勉強してないからこの程度だけと、勉強すればすぐ伸びるんだ。今はしてないからこのくらいだけどねってみたいいな感じの人いる。で、何かというとクラスをあげてくれ、とか。

W：クラスをあげる？

K：だから、私はこのくらいのレベルじゃ簡単すぎるからとかいうね。それで、いやいやテストの結果で入れているから、みんな同じくらいの点数なのにね。実際、クラスに入って何回かテストしたり、授業したりするじゃん。それを認めないんだ。これは、ただのテストだから、みたいな。

W：でもね、4技能、書く、読む、話す、聞くのがあるとしたら、話す技能が特に発達している人とかいるんじゃない。そのような人は、しゃべれるから自分ができると思うんじゃない？

K：そうそうそう。大体そうなんだよ。聞く能力とか、書く能力が高い人よりもね、ほかの4技能よりも話す能力の高い人がやっぱり言うね。書かせたりするとやっぱりだめだから、あなたの実力は、言葉は同じクラスの人よりできるかもしれないけど、書いたら漢字や文法の細かいところを知らなかったりするから、はじめからきちんとしてやったほうがいいんだよ。土台がしっかりたないと立派な家を建てられないんだよ、とかいっているけど。やっぱり、でも納得しない子がいる。

W：普通にクラスに参加しているとき、自分は全部わかっているのに細かいところまで説明されてそれがいやだから、クラスあげてくれというんじゃない？

K：いや、うん～。ま、そうかもしれない。でもね、結局何ヶ月かすると慣れちゃって、もうどうでもよくなっちゃうみたいだけど、クラスが。でも、いるね。

W：でもね、逆に人によっては、成績としては本当にうえなのに、自分はだめとか思っている人はいない？

K：いる、いる。下に下げてくれ、という人もいる。難しいからと。来たばかりだったらやっぱり、耳とか口が慣れていないじゃん。でも、テストの点数とかはすごくいい。ものすごくできるのに耳と口ができないから、自分は実力がないから下げてくれと。ま、下げるのはいいけど、でもさ、耳とか口はすぐ慣れるんだよ。

確かに、自信を持てるか持てないかは、ある程度、人の性格によるものだと思う。しかし、どこで、どのような形で日本語を習得してきたかも、学習者に自信を持たせる重要な一因になるのではないのか。長年、母国で日本語を勉強して、読むことと書

くことが上手にできるのに、どうしてある学習者は自信をなくしてしまうのか。学習者が必死に文章を読んだり単語や文法を覚えたりしたのは、結局、もっとスムーズに日本語でコミュニケーションするための努力ではなかったのか。その反面、漢字をまともに読めなかったり、難しい単語がわからなかったりしても、口と耳が慣れてしまえば流暢に話すこともできるそうだ。

漠然とした予想をKとの対話で確認しようとしたが、ここで私はいくつか新たな壁にぶつかった気分になった。まず、自分の日本語レベルに満足し、日本語でのコミュニケーションに自信を持っている学習者を、覚えている単語の数や文法表現が不十分だという理由で、参加するクラスやレベルを制限する権限を教師側に与えていいのかということである。ただテストで現れた成績を平均にして結果を出し、様々なコミュニケーション能力を持っている学習者達を同じ空間に押し入れ、管理している。教える立場としては、4技能の均等なレベル向上を望んでいるかもしれない。ところが、すでに4つの技能それぞれのレベルの間に差が広がりはじめた学習者に足りない部分の補充学習ばかりを強いることは、学習者個々人の個性や能力を無視した形の教育なのである。また、レベル分けの決め方の基準と、その判定根拠をいったいどこから求めているのかも疑問である。画一化したあるレベルまでの日本語を獲得したからといって日本語でのコミュニケーションが上手にできるとは考えられない。

それから二番目は、やはり読み、書きができて話せない学習者の問題である。確かに、(私もそうであったが)慣れればだんだん聞こえるし、話し始める。しかし、発音や文章表現を意識しながら会話の場面に臨んでいることと、何気なく日本語で話し合っていることとは、表面的には両方とも同じく「コミュニケーション活動」のように見えるかもしれない。しかし、前者と後者には、目には見えないが、はっきりした差がある。日本語での発話であることを意識しながら行ったコミュニケーションが、第二言語の話し手にはただトレーニングの産物に過ぎないし、本当に心から人と交流しているとは思わないからである。長い学習期間、それに加え母国という学習環境下の日本語習得では、言語と同時に日本語でコミュニケーションする場面においてのあ

らゆる情報が一緒に蓄積させられていくと思う。「より自然な」または「日本語らしい」コミュニケーションを手伝うつもりで与えるこのような情報は（日本語教育現場での「日本事情クラス」のようなもの）、かえって日本語を話すときの「規則」として学習者の潜在意識の中に根付いてしまい、「このように言っていていいかどうか」「どのような反応がこの場面で正しいのか」などといった戸惑いの形で、コミュニケーションを妨げていると思う。つまり、「上達」といわれる段階に近寄ろうとするほど、言語に対する「自信」は落ちていくのである。

3.3. 日本人には絶対になれないから

どうすれば、学習者が日本語という第二言語を用いてでも、人と心からのコミュニケーションを果たすことができるのだろうか。自らが習得した言語に対する「自信」、自分にはコミュニケーションの能力があるという「確信」がもっとも必要だと思う。しかし、このような「自信」や「確信」は意識的に努力することで手に入れられるものではない。

W: 今教えている学生たちは、大体自分自身のレベルをどう思っている？

K: 低く見ている。上級になればなるほど、低く見ている。

W: 私の大学時代の友達などを見てもね、ものすごく日本語が上手なんだけど、自分自身を低く見ているというか、とにかく自分の日本語に自信がないって。レベルが上がれば上がるほど自信をなくすみたい。

K: そうそうそう。だから、レベルがあがればあがるほど気がつくからじゃない？自分が話している日本語と聞く日本語が違うってみたい、いろんなことに気がつくから。やっぱり知らないことが多いっていうことに気がつくと思うんだよね。

W: だから、初級の場合は、たった一つの単語を覚えてそれが日本人に伝わったらそれだけでうれしい、で、コミュニケーションが取れたと思うかもしれない。それが上級になればなるほど、本当の日本語以外の細かい情報や知識が多いから、そんなことが自分の日本語を妨げているんじゃないかと思うんだけど。

K: そう、それはすごく感じる。上級になればなるほど、自分の日本語能力というか、それは（学生が）みんな言う。

私は、一時、日本語を上手に話すために日本人の真似を考えたことがある。自分の声のトンや人と向かい合う時の視線、指先からあごの動きまで、日本語で話す自分のすべてが何か違う感じがしたし、それが気になってやまなかった。日本社会に完全に同化して、いながらいないように溶け込みたかった。私は、言語の力に依存し、自分には外国である日本での生活にうまく融合しようと試みたのかも知れない。当時、別に精神的な面から肉体的な面までを完全に日本人化しようとしたわけではないけれども、（自ら思う）日本的な思考、感覚などを身につけたかった。日本が好きで日本人になろうとしたのではなく、せつかくここまで勉強してきたから、言葉遣いで外国人であることがばれないくらい上手にしたいと思ったのである。

学習者なら誰もがもっと上手に、もっと自由に日本語を使えるよう願っているだろうし、上の段階へと、向かい続けようとする。これ以上進むところのない上級レベルの学習者が次の目標として、日本人並みの日本語を目指すことは、もしかすると当然の帰結であるかもしれない。日本に来たばかりのとき、私もこのジレンマに陥ったことがあった。私はおろかな努力だと思い、断念したつもりであったが、Kの目に私はまだまだ「完璧な日本語」を目指している人のように映っているようであった。

K：レベルとしては（Wが）かなりの上級なわけでしょう。だから、その面においてはさ、自信をもっていいと思うんだけど、それは外国人と比べてっていうことになるわけじゃん。そこが多分、気に入らないんだと思うんだよね。

W：だから、私は日本人と比べているわけ。

K：そうそうそう。そうだと思うよ。日本人と比べて自分に日本語力が劣ってるって思ってるでしょ。私がいつも学生に言うんだけど、学生がいつも「私、何がたりないんですか」って、それで、あ、それはいっぱい足りないよって。

W：聞く人がいる？

K：いる、いる。もう全然足りないと思っているから、みんな。そう、特に上級になればなるほど。だから自分はね、すごい上手になりたい、もっともっと上手になりたいって。でも、みんな上手でしょうって。でも、いや、全然まだまだだって。本当に言うの。

W：だから、それは多分自分の日本語が満足できないから、

K: そうそう、でもね、私がいつも言うのは、あなた達は日本人になれないから、絶対なれないんだよって。でも、本当にそれに気づいてないみたい。たとえば、10年住んでも20年住んでも日本人にはなれないんだから。Wは母語がしゃかりできているわけでしょ、韓国語がね。で、プラス日本語もそこまでできるレベルであること以上に、何を望むのって思う。逆に、そんな日本人になろうんだって、韓国人なんだから、日本人になれるはずがないんだよ。

W: そうね、でも、しゃべっている立場としてはそんな風に考えるんじゃないで、自分の気持ちを全部いえなかったという悔しさがある。

K: でもね、もし自分の韓国語と第二言語である日本語を同じレベルになるっていうことは、どういうことなんだろうね。

W: でも、同じレベルになりたいということじゃなくて、

K: だからそこにたどり着くまで努力するんじゃないの、人は。だけど、そうはなれないよ。もう、すごい完璧主義なんだよ。大人になってから勉強した言葉をね、本当に自分の母語と同じように話せるようになるっていうのは、うん、人の能力として不可能なんじゃないかと私は思うんだよね。100パーセント日本人と同じようになるということは・・・ないでしょ。

W: そうね、私が望んでいるかもしれないね。

K: そう、望んでいて、多分それに向かって努力しているんだと思うけど、

W: それは、私だけでなくみんな望んでいるんじゃない？

K: そうね、やればやるほどね、多分それがなかったら人はそんなに上手になれないんだと思うけど、そうだね。でも、そこまで勉強したからやっぱり自信を持つべきだと思うけど、

W: でも、消極的になる。

K: わかる。

対話は結局、私が思った「日本語教育」の現状に対する事実確認にとどまり、何の結論も導くことができなかった。上級の学習者が自分の日本語に自信を持つのは当たり前前のことであるし、自信を持っていない人に対し教師としてできるものは、「自信を持ってください」という励ましの一言以外、何もないだろう。

私は3.1.で「理想の教育」と「現実の教育」という表現を用いたが、Kとの対話の時間、

ずっとこの「理想」と「現実」の間で悩んでしまった。日本語学習者が自分の日本語能力に自信を持つことは、特に「非現実」的なことでもないのに、「現実」の世界では、日本語レベルの向上により自信がだんだん落ちていくことが多い。Kは、日本人は「完璧な日本語のネイティブ・スピーカー」であるため、同じくならうとするのは無謀だといったが、やはりまだ自信のない学習者はその日本人のような日本語を「目標」に頑張っているのではないのか。

■ 4. 結論

人間が習得した第二言語を用いて、母語のように自由にコミュニケーションできるのか。私は、できると信じたいが、実はそれを願っているのかもしれない。ただし、自由なコミュニケーションとはどういうものなのかと聞かれてしまうと、それは学習者それぞれの心の判断にゆだねるしかない。

スコアとしての日本語が上級の段階であっても、学習者が自分自身を下手だと思い、実際のコミュニケーション場面では適切な言葉探りでもじもじしている場合と、読むことと書くことが（成績としては）下手であっても、本人が心から日本語で行われている人とおしゃべりの瞬間を楽しんでいる場合、コミュニケーションができていといえるのは、どっちなのか。もちろん、両方とも、ひとまずコミュニケーションは取れていると思う。ただし、同じコミュニケーション場面での言語活動においても、母語話者と第二言語話者とは言語を用いるときの心構えが違ふし、たとえ第二言語話者同士であっても、それぞれが該当言語で話すときの姿勢や言語に対する考え方は異なる。これは、学習者が第二言語を習得してきた環境と個人の持った言語能力などによるものだと思う。ところが、どのような環境の学習者であっても目標した言語の習得に喜びを感じる瞬間は、その言語で、言語の母語話者と隔たりのないコミュニケーションができたときではないのか。日本語学校で、第二言語の学習者は言語習得のため、たくさんの単語や文法を覚えたり、テープを繰り返して聴きながら練習したりする

し、教師側は、学習者がもっと自然に日本語で話して、書いて、読んで、聞けるようにさまざまな工夫を繰り返し重ねる。

しかし、コミュニケーションのため、量的に膨大な学習がなされたとしても、人と関わりあう実際の場面での質的なコミュニケーションはどうだろうか。コミュニケーションをその量や質で判断することは若干、無理を伴うことなのかもしれない。しかしながら、私はここでいうコミュニケーションの質が心からコミュニケーションすることであり、学習者の誰もが望む「自然な日本語」になることだと思う。

ここで「私にとって日本語教育は何か」という質問にもどると、私にそれは、各々の学習者が心からコミュニケーションできるように「自信を持たせること」である。「2. 動機文」で私は、日本語教育を「心から人とコミュニケーションできるように学習者を手伝い、励ますことだ」と述べたが、結局、「学習者を手伝い、励ますこと」を「学習者に自信を持たせること」に解釈してしまった。それに、対話の時間を持ってからレポートをまとめている今の瞬間も、私は具体的にどのように学習者に自信を持たせたらいいのか、見込むことすらできない。ただ、今回のレポートを通じて、学習者が母語を話すときのように第二言語である日本語でコミュニケーションするには、もっと自分自身の言語能力に「自信を持つ」べきだということや、私は学習者が言語や事情の学習より、自信を持ってコミュニケーションに挑めるような形の「日本語教育」に力を注ぎたいということくらいに気づいた。

「自信のある日本語コミュニケーション」は、まだ未熟な段階である私がただいま考え始めた「日本語教育」である。これから、この「自信」とはどのようなものであり、学習者がどうすれば自信を持つことができるのか、考えて行きたい。また、日本語を教える立場の人に、学習者に「自信を持たせる」ことはどういう意味を持つのかなどをゆっくりと探っていきたいと思う。

私は、母国で日本語を長年学習した人であるため、日本国内での日本語教育よりも国外での教育にもっと興味を持っている。日本国外での日本語学習者のほうが、日本国内で言語を習得した人より「自信度」が落ちているだろうと予想するし、これはやは

り、日本語で人とかかわるチャンスの乏しい環境下での学習に起因すると思う。どこで日本語を習得しても、心から人とコミュニケーションできるように！「理想の教育」かもしれないが、その「現実的な具体化」を模索していきたい。

■ 5. おわりに

レポート作成のため人と対話の時間を持ったのは、今回が二度目である。まず、動機文を書くことも、それから対話の時間を設け、人と語り合うことも楽しむ (!) ほうだが、私はその後、録音した内容を何回も繰り返して聞く文字起こしの作業がきらいだ。ごちないイントネーション、時々のが詰まったかのような息切れ、とてつもない方向にはねるアクセントなど、耳障りの自分の声までも何回も繰り返して聞かないといけない。意識しまいと思っても、耳から流れてくる自分のミステイクが胸に釘を打つ。どうやらがっかりである。Kは「レベルがあがればあがるほど、自分が話している日本語と聞く日本語が違うということに気づく」といったが、私はこの言葉を毎日実感している。

私が思う「日本語教育」やそのトピックとして扱うものは、実は全部、私個人が抱えた問題である。「どうして、自信を持ってないの？」と問い詰められても、自信は意識的に持つものではないから、答えられない。しかしながら、自信を持って日本語でコミュニケーションができるならば、その時間が2倍も3倍も楽しくなるだろうと、いつも悔しく思う。

日本に来てからずっと何か気が食わなかったが、それが何なのか、わからなかった。日本語をもっと上手に話すため、日本人の言い方や身振り手振りをそっと観察しながら、いつこれを全部見につけるんだろうと、漠然とした無力感を覚えていたりした。

大学院での研究方向が「日本語らしい日本語」から急転換し「どうでもいいから、

人と楽しくコミュニケーションする」ことに変わってから、私の生活パターンはもちろん、考え方や人に接しあうときの態度まで、少しずつ変わってきた。積極的に人とコミュニケーションしようとする姿勢や、自信を持って相手と交流しようとする声や上げたりする心構えが、実際のコミュニケーションにとっても効果的であった。第二言語としての日本語ばかりでなく、中学時代からの受験英語も最近は恥を知らず、公でしゃべったりする。

第二言語の習得が人にどのような意味を持つのかという根本から考え始めると、私にとって言語はやはりコミュニケーションの手段である。どのような手段を用いたとしても、社会生活を営むことにおいてプラスになってくれれば、それで十分ではないのか。今回のレポートをこのような考え方からはじめさせ、私は、同じ観点で何かを見つけ出そうといろいろ友達のKと語り合ってみた。

実は、何も見つけたものもなく、ただ自信を持って話そうとまとめてしまった感じもするが、これでただ結論が出てしまったかということ、そうでもない。これからどのような立場で、何を、どうやって研究していくかという、私なりの出発点を今回のレポート作成過程でくっきりと見つけ出したからである。

最後に、コミュニケーション能力についてであるが、録音したテープを何回も聴きなおしながら、自分のコミュニケーション行動に驚いてしまった。質問を投げかけたのに、Kに答えるチャンスを与えず私一人でしゃべり続けたり、失礼なほど勝手に話題の転換するなど、コミュニケーション能力とは考えられない行動がとくに目立った。実際の対話時間では気づかずに後でわかったのが、Kは途中何回も何か発言しようとしたことを、注意の浅い私がことごとく遮っていたのである。レポートの本文で私は、人間なら誰もがコミュニケーション能力を持っていると勝手に断言したが、今回の聞きなおしてそのコミュニケーション能力について疑問も持つようになった。コミュニケーション能力というのが日本語習得にどんな影響を与えているのか、再び考えてみないといけないと思うようになっている。

参考文献

新村出 編 (2002) 広辞苑 (第五版) 岩波書店

徳井厚子 (2002) 多文化共生のコミュニケーション アルク

ハウエル, W. S.・久米昭元 (1992) 感性のコミュニケーション—対人融和のダイナミズム
を探る 大修館書店

岡田伸夫 (2001) 英語教育と文法意識の高揚 横川博一 (編) 現代英語教育の言語文学的
諸相 三省堂

Canale, M. & Swain, M. (1980) Theoretical bases of communicative approaches to second
language teaching and testing, *Applied Linguistics*, 1, 1-47.